

Dear Papa, 誕生日には 18 本のバラを

樋渡 桃子

JFC ネットワークでの 3 ヶ月のインターン期間中に、私はさまざまな事を経験し、いろいろなことに思いを巡らせました。つきましては、この感想文が大変個人的な内容となってしまうことをお許しください。

まず、4 年間通った慶應義塾大学を卒業しました。そして、思いがけず妊娠し、初期流産しました。前に進むために、父親の連絡先を消しました。最近母親が統合失調症で何度目かの強制入院をしました。良いニュースばかりではなく、ともすると誰かの一生分の不幸でも訪れたかとも思えるほど、不運の連続でした。

そもそも、私がこのインターンに応募したきっかけは、私自身が両親の離婚に伴い母子家庭で育ち、父親と面識がないという、JFC との共通点を持っていたからでした。インターンを始めた当初は、翻訳資料中の JFC が子どもの頃の自分と重なり、辛く感じました。一方で、私と JFC の間には決定的な違いがあり、それは、JFC は父親と会うことを望んでいるということでした。自分を遺棄した父親になぜ会いたいのだろう。自分だって昔は、父親を恋しく思っていたにも拘らず、子ども心を忘れていた私に、翻訳資料中の JFC たちは徐々に答えを教えてくださいました。また、3 ヶ月に亘り、メインの翻訳業務の他にも貴重な経験を沢山させていただき、特に印象に残ったのは以下のことでした。

まず、4 歳の JFC の男の子の日本国籍取得に際して、名前に用いる漢字を考えました。一生使うものだから、責任は重大です。一生懸命考えました。画数が多くて、K 君にはまだ難しいかもしれないけれど、いつか書けるようになって、気に入ってもらえたら嬉しいです。次に、成年年齢の引下げが JFC の日本籍取得に及ぼす影響についての意見書の草稿を書きました。すでに決定した事項について意見書を書いても意味がないように思われたのですが、力不足でも行動してみたいと思い提案しました。最後には、JFC ネットワーク理事の近藤博徳弁護士に引き継いでいただけて、とても嬉しかったです。そして、翻訳した数々の JFC から父親宛ての手紙の中で、特に印象深いものがありました。20 歳の JFC、A さんが書いたものです。以下、少しだけ引用させていただきます。

パパ、授業参観のときに、クラスメートが家族連れだったのを覚えています。私は母と二人きりでしたが、彼らは皆、充実し、幸せそうでした。私の人生には何か欠けている、それがパパなのだと思います。父親がいないと、生きていくのは大変なことです。でも、パパに会えるから、パパと一緒にいられるから、私はこの苦しみを耐えてきたのです。パパは知らないと思うけど、私は誕生日のたびに、パパに会いたい、パパと一緒にいたいと願うようになりました。18 歳の誕生日、その時の私の夢はただ一つ、18 本のバラの中でパパが私と一緒に踊ってくれることでした。でも、生活が苦しくて、ケーキを買う余裕もないのです。

パパ、私は勉強を終えて、母を助け、パパの孫を養いたいと思います。もう一度パパに会って、パパを抱きしめることができたらと思います。私はパパをとっても愛しています。パパに会い、パパと一緒にいることだけが私の願いです。

これほどまでに素直に父親に愛情を求め、それを見事に言葉にできて、さらには子育てをしながら大学進学を目指すAさんのひたむきな姿に、胸を打たれました。私もかつて父親に手紙を書いたことがあります。それはそれは他人行儀で無愛想なものでしたから、Aさんを心から尊敬します。

驚いたことに、自分自身が親になるかもしれないと思った時、今まで抱えていた孤独や不安が消えていきました。親も一人の人間だと分かったからかもしれません。父親がいなくても、不完全な人間などではありません。むしろ、他人の痛みのわかる、強くて優しい人間です。

長くなりましたが、他にも、寝坊して弁当を持参せず恵んでいただいたランチの数々など、まだ書き足りないエピソードばかりです。里枝子さん、誉子さん、しなのさん、それから同じインターンの桃香さん、この度は本当にありがとうございました。



インターンシップを経験して

菊地 桃香

(宇都宮大学国際学部国際学科3年 インターンシップ期間は2年生)

私は、大学2年生の春休みに、自分の将来のためになることをしたい、何か今までの人生で経験していない新しいことをしたい、という思いから、インターンシップ関係の団体を通じて、JFCネットワークさんに2か月間お世話になることになりました。インターンシップを終えた今、確かに2か月前とは、この世界を見る目が変わっている自分がいます。

私の中で一番大きく変わった点は、視野の広さです。JFCネットワークの活動では、国籍や認知など、今まで私が何も不自由を感じず、意識もしなかった部分を主に扱っていたので、新鮮なことばかりでした。私には見えなかった存在をひしひしと感じる毎日でした。仕事内容は、必要な書類の英語から日本語への翻訳でした。特に、ケースの背景の翻訳では、紙の向こう側にいる人の存在や人生を強く感じ、これってどんな気持ちなのかな、どんな幸せでどんな痛みなのかな、と心を寄せていました。私は、自分の心を

誰かの心を寄せることがコミュニケーションにとって、とても重要であると考えています。「他人の靴を履いてみること」（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』、ブレイディみかこ）の表現を心に留めて生活していますが、JFCネットワークで触れる人たちの靴は履いたことがなく、だからこそ想像力を沢山使いました。もちろん、想像力が鍛えられたことも大きな財産になりましたが、「履いたことがない靴があること」がまだまだたくさんあることを知ることができたことは、私の視野を大きく広げてくれました。

また、言語への興味も膨らみました。私はもともと言語に興味があり、国際学部でも言語を勉強しています。学校での勉強では、テストの点数や成績に重点が置かれていました。このインターンシップ中に、英語が生きるために使われていたり、同じ部屋で里枝子さんがタガログ語でコミュニケーションをとるのを聞いたりする機会が多くありました。これはとても貴重な経験でした。ある日、里枝子さんとタガログ語でコミュニケーションをとる方がいらっしゃったときに、私はタガログ語が話せないので、まったく理解できませんでした。ですが、表情や声のトーンから、何かつらい思いを抱えていることだけはわかりました。つらい人が目の前にいるのにも関わらず、私が何も力になれない、悩みを聞かせてもらうことも、吐き出させてあげることもできないことに、無力感を抱きました。この気持ちから、前段落と重なりますが、言語が分かるようになれば、履ける靴の種類も数も増えると思いました。たくさんの言語に触れ、勉強したいです。そして、今よりも多くの人々の心に寄り添えるようになりたいです、いや、なります！

この2か月で、私は自分のスキルや人間としての成長を感じています。そして何より、このインターンシップをさせていただいたからこそその出会いが私の宝物になりました。東京まで通うのは、決して楽ではありませんでしたが、優しく明るく接してくださる方がいて、ありがとうと言葉にしてくださったり、私の話を聞いてくれたりすることが、このインターンシップをさらに楽しく、わくわくするものにしてくれました。2か月間私を受け入れてくださった皆さんにはとても感謝しています。ありがとうございました。

私は大学入学前から、「世界中の人を笑顔にしたい」、という将来の目標を持っています。JFCネットワークで活動させていただいたことで、私は言語や文化を超えて、人々の笑顔を見たい、とさらに強く思いました。大学2年生にこのような、心を動かされる経験ができて、本当に良かったです。改めて、皆さん本当にありがとうございました。これからもぜひ、よろしくお願ひします！

